

山本陽子先生 略歴



<学歴>

昭和48年 4月

早稲田大学 第一文学部 芸術学（美術史）入学

昭和52年 3月

早稲田大学 第一文学部 芸術学（美術史）卒業
[文学学士]「不空羼索観音像について」

昭和52年 3月

博物館学芸員資格（52-70号）取得

昭和52年 4月

早稲田大学大学院 文学研究科 芸術学（美術史）
修士課程入学

昭和55年 3月

早稲田大学大学院 文学研究科 芸術学（美術史）
修士課程修了[文学修士]『十一面観音来迎図様
—その背景—』

昭和58年 4月

早稲田大学大学院 文学研究科 芸術学（美術史）専攻 博士課程入学

平成 3年 3月

早稲田大学大学院 文学研究科 芸術学（美術史）専攻 博士課程単位取得

平成16年 4月

早稲田大学[博士（文学）]『絵巻における神と天皇の表現』

<職歴>

平成 5年 4月 明星大学 日本文化学部 非常勤講師（平成14年3月まで）

平成14年 4月 明星大学 一般教育 人文分野 助教授（平成19年3月まで）

平成19年 4月 明星大学 一般教育 人文分野 准教授（平成21年3月まで）

平成21年 4月 明星大学 一般教育 人文分野 教授（平成22年3月まで）

平成22年 4月 明星大学 人文学部 全学共通教育 教授（平成30年3月まで）

平成30年 4月 明星大学 教育学部 全学共通教育 教授（現在に至る）

<研究分野>

美学・美術史（東洋美術史、中世日本美術史、仏画、説話画、垂迹美術、絵巻物、顔、マンガ、奈良絵本、説話、伝説、歌川国芳、怪異）

<現在の所属学会>

早稲田大学美術史学会・美術史学会・日本宗教文化史学会（編集委員・評議員）・説話文学会・説話伝承学会・東アジア怪異学会

<著書> (単著)

1. 『絵巻における神と天皇の表現—見えぬように描く—』中央公論美術出版 1-461頁 平成18年
2. 『絵巻の図像学—「絵そらごと」の表現と発想—』勉誠出版 1-392頁 平成24年
3. 『図像学入門—疑問符で読む日本美術』勉誠出版 1-229頁 平成27年
4. 『はじめての日本美術史』山川出版社 1-207頁 平成30年
5. 『物語る仏教絵画—童子・死・聖地—』勉誠社 1-595頁 令和5年
6. 『増補改訂版 図像学入門—疑問符で読む日本美術』勉誠社 1-257頁 令和6年
7. 『隠された顔—絵巻のなかの尊き者たちの描き方』教育評論社 1-223頁 令和6年
8. 『入門 日本美術史』ちくま新書1835 筑摩書房 1-286頁 令和6年

<著書> (共著)

1. 達日出典編『宗教文化全書 3 日本の宗教文化 下』第六章「中世の宗教美術—神仏と祖師の姿—」192-222頁、高文堂出版社 平成14年
2. 大橋一章・新川登亀男編『「仏教」文明の受容と君主権の構築』『熊野曼荼羅に見る神仏のヒエラルキー—切目王子を中心に—』321-347頁 勉誠出版 平成24年
3. 岩波講座『日本の思想 8聖なるものへ』『聖なるものの誕生—見えない神々はどのように表され、隠されたか』pp.31-60 岩波書店 平成26年

<報告書> (執筆箇所)

1. 『仏教美術研究上野記念財団助成研究会報告書第三十二冊』『研究発表と座談会 神の姿をあらわす』(研究発表)「神社縁起の絵巻における神の表現」10-15頁、(座談会)「神の姿をあらわす」23-35頁、平成17年
2. 科学研究費補助金による報告書『交流と伝統の視点から見た仏教美術の研究—インドから日本まで—(研究代表者 宮治昭)』『聖衆来迎寺蔵六道絵人道不浄相新死相について』241-250頁、平成20年
3. 平成19・20年度科学研究費補助金・基盤研究(C)19520114『物語絵画における武士—表現の比較研究と作例のデータベース化(研究代表者 山本陽子)』報告書「経過報告」5-7頁、「小画面説話画における武者の肉体表現とその起源」19-38頁、「明星大学図書館所蔵『平家物語』絵本の挿絵について附 林原本・明暦版本・真田本・明星本場面对照表」66-84頁、平成21年
4. 共同研究報告「明星大学蔵絵入り和本の基礎的研究とWEB公開、教育実践への応用」「明星大学本『徒然草』の挿絵について」『明星大学研究紀要』[人文学部・日本文化学科](19) 169-174頁、平成23年
5. 明星大学平成22年度特別研究費(共同研究助成費)研究成果報告書『明星大学蔵絵入り和本の基礎的研究とWEB公開、教育実践への応用(代表研究者 山本陽子)』『明星大学平成22年度特別研究費(共同研究助成費)「明星大学蔵絵入り和本の基礎的研究とWEB公開、教育実践への応用」について』5-6頁、「明星大学本『ふんしやう』絵巻の挿絵について」24-26頁、「明星大学本『新曲』の挿絵について」27-30頁、「明星大学本『徒然草』の挿絵について」36-44頁、平成23年

6. 「第二部 明星大学本『平家物語』絵本巻一の絵画部分について」「共同研究報告 新出の明星大学本『平家物語』絵本巻一について」『明星大学研究紀要』[人文学部・日本文化学科] (24) 6-36頁 平成28年
7. 「つなぐ霞―物語表象から」「〔シンポジウム〕平成30年9月例会「お伽草子と説話」『説話文学研究』(54) 136-145頁 平成31年

<学術論文> (単著)

1. 「フリア本地蔵十王図と佐羅陀山地蔵図様の成立について」『古美術』(59) 45-55頁 (川口陽子名義) 昭和56年
2. 「十一面観音来迎図様―南都における展開とその背景―」『美術史研究』(20) 80-94頁 (川口陽子名義) 昭和58年
3. 「白山垂迹曼荼羅考―遊行寺本を中心に―」『佛教藝術』(157) 24-39頁、昭和59年
4. 「春日赤童子考」『美術史研究』(25) 26-45頁、昭和62年
5. 「水月観音の成立に関する一考察」『美術史』(125) 28-38頁、平成元年
6. 「粉河寺童男行者信仰小考」『美術史研究』(28) 1-24頁、平成2年(早稲田大学美術史学会賞)
7. 「焰摩天十九位曼荼羅中尊と五道大神の像容について」『鹿島美術財団年報』(9) 179-183頁、平成3年
8. 「法華寺蔵阿弥陀三尊及童子図の使途に関する一考察」『美術史研究』(30) 123-144頁、平成4年
9. 「異界の季節表現―春秋が併存する表現の起源と拡がり―」『西垣晴次先生退官記念宗教史・地方史論纂』157-178頁、刀水書房 平成6年
10. 「春日権現験記絵に見る「神の顔を描くことをはばかる表現」について」『美術史』(140) 189-206頁、平成8年
11. 「僧の声を聴く―絵巻の中の声の表現について―」『明星大学研究紀要』[日本文化学部・生活芸術学科] (4) 43-51頁、平成8年
12. 「見えぬように描く―絵巻における日本の神々の描かれ方―」『宗教美術研究』(4) 19-35頁、平成9年
13. 「「～ところ」という言葉―絵巻の画中詞の発生に関する一考察―」『明星大学研究紀要』[日本文化学部・生活芸術学科] (5) 49-57頁、平成9年
14. 「菩提樹像小考―ボストン美術館本を中心に―」『佛教藝術』(238) 34-53頁、平成10年
15. 「『華嚴縁起』義湘絵の一場面から―なぜ善妙はあられない格好で泣かなければならなかったか―」『明星大学研究紀要』[日本文化学部・生活芸術学科] (6) 51-57頁、平成10年
16. 「神社縁起絵巻における神々の描き方―いかなる場合に神の姿を表すことをはばかるか―」『日本美術襍稿 佐々木剛三先生古希記念論文集』153-174頁、明德出版 平成10年
17. 「誉田宗廟縁起絵巻の八幡神はなぜ顔もあらわに描かれたか―神社縁起絵巻における神と天皇の位置について―」『明星大学研究紀要』[日本文化学部・生活芸術学科] (7) 47-57頁、平成11年

18. 「絵巻における天皇の姿の表現」『MUSEUM』(564) 49-72頁、平成12年
19. 「御簾から見える天皇の目—絵巻における特異な天皇表現について—」『明星大学研究紀要』[日本文化学部・生活芸術学科] (8) 33-41頁、平成12年
20. 「源氏絵における天皇の描き方」『日本宗教文化史研究』(7) 103-123頁、平成12年
21. 「長沙馬王堆漢墓出土のT字形帛画の形状に関する一考察」『仏教芸術』(253) 13-26頁、平成12年
22. 「天皇を描くことをはばかり表現の終焉—『孝明天皇紀附図』と『明治天皇紀附図』における天皇の顔の表し方—」『明星大学研究紀要』[日本文化学部・造形芸術学科] (9) 21-35頁、平成13年
23. 「『承安五節絵』の似絵性について—住吉内記系の模本による—」『跡見学園女子大学紀要』(35) 95-177頁、平成14年
24. 「冷泉為恭の天皇表現について」『明星大学研究紀要』[日本文化学部・造形芸術学科] (10) 17-25頁、平成14年
25. 「絵巻における天皇の描かれ方—平安朝から近代まで—」『アジア民衆史研究』(7) 30-37頁、平成14年
26. 「形象化の宗教的忌避と表現意志との間—現代日本の漫画・アニメーションにおける偶像崇拜禁忌の問題—」『明星大学青梅校舎日本文化学部共同研究論集(6) 言語と形象』359-375頁、平成15年
27. 「新出の東北大学図書館本『承安五節絵巻』模本について」『明星大学研究紀要』[日本文化学部・言語文化学科] (11) 79-98頁、平成15年
28. 「十禅師童形像小考」『日本宗教文化史研究』(14) 42-64頁、平成15年
29. 「江戸城障壁画絵様および京都御所障壁画における天皇の表現について」『明星大学青梅校舎日本文化学部共同研究論集(7) 時間と空間』396-413頁、平成16年
30. 「平安時代の美と高貴の最上級の表現について—なぜ絵巻の中で天皇の顔が隠されたのか—」『第53回 美学会全国大会 当番校企画 報告書』159-169頁、平成16年
31. 「マンガ以前の日本絵画の時間と空間表現—マンガのコマとの比較において—」『明星大学研究紀要』[日本文化学部・言語文化学科] (12) 113-126頁、平成16年
32. 「切目王子小考—熊野曼荼羅から一本ダタラまで—」『明星大学研究紀要』[日本文化学部・造形芸術学科] (12) 29-36頁、平成16年
33. 「冷泉為恭と百人一首」『明星大学青梅校日本文化学部共同研究論集(8) 批評と創作』322-353頁、平成17年
34. 「伴大納言絵詞鎮魂説の再検討—脇役の顔貌表現を中心に—」『明星大学研究紀要』[日本文化学部・言語文化学科] (13) 41-55頁、平成17年
35. 「後ろ姿の自画像について—歌川国芳の作品を中心に—」『明星大学研究紀要』[日本文化学部・造形芸術学科] (13) 31-39頁、平成17年
36. 「聖衆来迎寺蔵六道絵人道不浄相図に関する一考察—似て非なるもの—」『明星大学青梅校日本文化学部共同研究論集(9) 理想と現実』219-240頁、平成18年
37. 「聖衆来迎寺本六道絵「天道」幅小考」『明星大学研究紀要』[日本文化学部・言語文化学科] (14) 61-72頁、平成18年
38. 「瓢箪足小考—鳥居派・又兵衛・仁王像—」『明星大学青梅校日本文化学部共同研究

- 論集 (10) 言語と芸術』252-278頁、平成19年
39. 「崇る御衣木と造仏事業—なぜ霊木が仏像の御衣木に使われたのか—」『明星大学研究紀要』[日本文化学部・言語文化学科] (15) 73-83頁、平成19年
40. 「金戒光明寺蔵地獄極楽図屏風の使用方法について」『日本宗教文化史研究』(21) 82-101頁、平成19年
41. 「天人から天女へ—なぜ五衰の天人が女性とされるようになったか—」『明星大学研究紀要』[日本文化学部・言語文化学科] (16) 89-98頁、平成20年
42. 「平安絵画における筋肉表現の受容と変容—武者絵以前の「瓢箪足に蚯蚓描」—」『明星大学研究紀要』[造形芸術学部・造形芸術学科] (16) 27-34頁、平成20年
43. 「『鳥獣戯画』甲巻の的弓場面の逆行性について」『日本美術の杜 村重寧先生星山晋也先生古希記念論文集』156-168頁、竹林舎 平成20年
44. 「小画面説話画における武者の顔貌表現について」『明星大学研究紀要』[造形芸術学部・造形芸術学科] (17) 31-39頁、平成21年
45. 「『平家物語』絵本・絵巻の挿絵について—明星大学図書館所蔵本を中心に—附 林原本・明暦版本・真田本・明星本場面对照表」『明星大学研究紀要』[日本文化学部・言語文化学科] (17) 21-39頁、平成21年
46. 「雲乗の十一面観音図様の成立について」『佛教藝術』(304) 39-71頁、平成21年
47. 「『洞窟の頼朝』の顔貌—近代日本画における武者表現—」『明星大学研究紀要』[造形芸術学部・造形芸術学科] (18) 27-33頁、平成22年
48. 「あばら屋の美学—絵巻に描かれた荒廃—」『明星大学研究紀要』[日本文化学部・言語文化学科紀要] (18) 95-103頁、平成22年
49. 「『粉河寺縁起絵巻』の長者の娘の出家について—縁起絵巻と説話—」高橋亨編『平安文学と隣接諸学 (10) 王朝文学と物語絵』425-448頁、竹林舎 平成22年
50. 「柳瀬正夢「五月の朝と朝飯前の私」の制作動機—モダンボーイとカミソリ—」『明星大学研究紀要』[人文学部・日本文化学科] (19) 69-78頁、平成23年
51. 「神を見ることがと描くこと—石清水八幡宮の事例を中心に—」伊藤聡編『中世文学と隣接諸学 (3) 中世神話と神祇・神道世界』133-152頁、竹林舎 平成23年
52. 「『大人げないもの』が発達するとき—相似形としての絵巻とマンガ—」『美術フォーラム21』(24) 〈特集〉「漫画とマンガ、そして芸術」23-28頁、平成23年
53. 「歌川国芳における瞳の白点表現—『東西海陸紀行』摂取以前を考える—」『明星大学研究紀要』[人文学部・日本文化学科] (20) 179-193頁、平成24年
54. 「『さかさまの幽霊』再考」『明星大学研究紀要』[人文学部・日本文化学科] (21) 141-154頁、平成25年
55. 「須彌山石考—水源伝説としての崑崙山—」『てら ゆき めぐれ 大橋一章博士古稀記念美術史論集』153-163頁、中央公論美術出版 平成25年
56. 「聖衆來迎寺本六道絵人道不浄相幅と九州国博物館本九相図絵巻における瞰相の図像的根拠について」『日本宗教文化史研究』(33) 55-73頁、平成25年
57. 「二松本『保元物語』『平治物語』挿絵の天皇表現について—庶民の描かれた『御即位図』との関連—」『源平の時代を視る 二松学舎大学付属図書館所蔵奈良絵本『保元物語』『平治物語』を中心に』52-74頁、思文閣出版 平成26年

58. 「異本伊勢物語絵巻の絵画表現を考える―「女絵」でない伊勢物語絵へ―」『明星大学研究紀要』[人文学部・日本文化学科](22) 327-340頁、平成26年
59. 「武者絵における仏教天部像の影響―歌川国芳の作品を中心として―」『民族芸術』(30) 103-110頁、平成26年
60. 「説話と絵画に見る屋根・軒・天井における怪異」『説話・伝承学』(22) 139-153頁、平成26年
61. 「東京国立博物館本「土蜘蛛草紙」絵巻と人形芝居―特異な筋立てと絵画表現の理由について―」『明星大学研究紀要』[人文学部・日本文化学科](23) 285-299頁、平成27年
62. 「宮曼荼羅への参詣人の出現について―普陀山図の影響を考える―」『日本宗教文化史研究』(37) 1-21頁、平成27年
63. 「葛飾北斎の肖像画における自己演出」『明星大学研究紀要』[人文学部](52) 37-52頁、平成28年
64. 「「長谷寺縁起絵巻」の御衣木伝承を考える―疫木の祟り鎮めとしての造像と霊性の根拠―」『仏教美術論集(6) 組織論―制作した人々』91-107頁、竹林舎 平成28年
65. 「奈良絵本『新曲』挿絵の制作過程を考える―明星大学本と諸本および『源氏小鏡』を比較して―」『明星大学研究紀要』[人文学部・日本文化学科](25) 35-48頁、平成29年
66. 「光琳の説話人物画の描き方と享受のされ方―なぜ人物が花よりも印象に残らないのか―」『説話・伝承学』(25) 1-14頁、平成29年
67. 「京都市立芸術大学所蔵「平家物語絵巻」粉本について―伝土佐光信筆「平家物語絵巻」の模本として―」『説話文学研究』(52) 175-188頁、平成29年
68. 「怪火か光明か―日本における発光するものに対する好悪感覚の変化―」『明星大学研究紀要』[人文学部・日本文化学科](26) 17-31頁、平成30年
69. 「光るものは奇跡か妖怪か―和洋・神仏における発光するものへの好悪感覚の相違―」『東の妖怪西のモンスター 想像力の文化比較』240-260頁、勉誠出版 平成30年
70. 「上から出る幽霊―地上七・八尺の異界―」『幽霊の歴史文化学』203-230頁、思文閣出版 平成31年
71. 「明星大学本『文正草子』絵巻と挿絵図様の酷似する『文正草子』絵巻について―チェスター・ビーティー本と東海大学本―」『明星大学全学共通教育研究紀要』(1) 97-109頁、平成31年
72. 「大報恩寺蔵十大弟子伝優婆離像の名称について―瞳の白点表現を中心に―」『日本宗教文化史研究』(45) 18-35頁、平成31年
73. 「切目王子とその信仰」『明星大学全学共通教育研究紀要』(2) 21-30頁、令和2年
74. 「筈と土蜘蛛―古典がジャンルを越えるとき」『古典の未来学』419-440頁、文学通信 令和2年
75. 「鳥獣戯画の猫と童子経曼荼羅」『明星大学全学共通教育研究紀要』(3) 19-28頁、令和3年
76. 「大黒天の背丈から―異界の価値観について―」『説話・伝承学』(29) 89-104頁、令和3年
77. 「絵巻の中の神と「モノ」―目に見えぬものをいかに描くか」『怪異学講義』399-423

頁、勉誠出版 令和3年

78. 「長岳寺所蔵六道十王図における天道の有無と設置状況について」『明星大学全学共通教育研究紀要』(4) 1-14 頁、令和4年
79. 「斜め構図の兜率天曼荼羅図を考える—延命寺本と根津美術館本を中心に—」『明星大学全学共通教育研究紀要』(5) 1-15 頁、令和5年
80. 「龍宮童子譚における「花売柴刈型」の語られ方—異界の価値観から—」『説話・伝承学』(31) 183-197 頁、令和5年
81. 「似絵を描く姿勢—細線重ね描きについて—」『全学共通教育研究紀要』(7)、令和7年3月(予定)

<その他>

1. 「丸井金猊と古美術の学習—画家の茶目っ気」『丸井金猊作品集』（一宮市博物館「いまあざやかに 丸井金猊展」図録）50-51 頁、平成20年
2. Web公開データベース『奈良絵本・絵巻の世界—武士の物語絵巻をよむ—』「本プロジェクトについて・『平家物語』挿絵全解説・『平家物語』挿絵コラム・『新曲』挿絵全解説・『新曲』挿絵コラム・『文正草紙』挿絵全解説・『文正草紙』挿絵コラム」「物語絵画における武士—表現の比較研究と作例のデータベース化」平成19年度科学研究費補助金・基盤研究(C)・「明星大学蔵絵入り和本の基礎的研究」明星大学平成20年度特別研究費による。平成20年
3. 「姿を見せない神—三輪山の大神主神—」『別冊太陽 (194) 古事記』124-127 頁、平凡社 平成24年
4. web公開データベース『絵本・絵巻の世界』明星大学本『徒然草』「挿絵全解説・挿絵コラム」平成24年
5. 研究ノート「三山小考—三山もしくは三峯という構成と根拠について—」『日本宗教文化史研究』(35) 89-101 頁、平成26年
6. 小論「江戸文化の浮世絵—浮世絵は美術品か」歴史科学協議会編『歴史の「常識」をよむ』156-159 頁、東京大学出版会 平成27年
7. コラム「怪異が現れる場所としての軒・屋根・天井」『アジア遊学』(187)「怪異を媒介するもの」94-99 頁、平成27年
8. 講演録「見てはならない神々の表現と受容—日本の神々はどうに表されてきたか—」特集「見える神、見えない神—神の不可視性をめぐるレトリック」『総合人文科学研究センター研究誌 WASEDA RILAS JOURNAL』No.4 (第66回美学会全国大会、早稲田大学戸山キャンパス、2015年10月10日) 283-289 頁、平成28年
9. コラム「軍記絵のなかの異性装」『アジア遊学』(210)「歴史のなかの異性装」41-46 頁、平成29年
10. 監修「超おさらい！日本美術史」（平安時代・名作をたどれば一目瞭然、美人のトレンド図鑑・日本の「カワイイ」は動物たちから始まった!?）『Pen』(465)、平成30年
11. コラム「童男行者像—粉河寺観音像の化身—」『国宝粉河寺縁起と粉河寺の歴史』39-40 頁、和歌山県立博物館、令和2年
12. 研究ノート「粉河寺蔵「南海名山普陀勝境図」をめぐって」『日本宗教文化研究』(51)

80-90頁 令和4年

13. 研究ノート「高女房の怪—東京国立博物館本「土蜘蛛草紙絵巻」拾遺—」『明星大学全学共通教育研究紀要』(6) 33-40頁、令和5年
14. 研究ノート「歴史漫画でムハンマドをいかに表すか—絵巻の神を描かない表現と比較して—」『日本宗教文化研究』(55) 53-62頁、令和6年
15. コラム「「顔を隠して描く」こと」『美術の窓』令和7年3月(予定)

<学会発表>

1. 「十一面観音来迎図様」於早稲田大学美術史学会総会(川口陽子名義)昭和56年
2. 「水月観音創作の背景をめぐって」於美術史学会全国大会、昭和63年
3. 「粉河寺童男行者信仰小考」於早稲田大学美術史学会例会、昭和64年
4. 「法華寺阿弥陀三尊及び童子図における一考察」於早稲田大学美術史学会例会、平成3年
5. 「ボストン美術館蔵菩提樹像について」於古代中世絵画史研究会、平成3年
6. 「『春日権現験記絵』における神異の描かれ方」於古代中世絵画史研究会、平成7年
7. 「『春日権現験記絵』に見る「神の顔を描くことをはばかる表現」について」於美術史学会全国大会、平成7年
8. 「縁起絵巻における神々の顔貌表現について」於早稲田大学美術史学会総会、平成9年
9. 「絵巻の中の天皇の表現について」於早稲田大学美術史学会 日本美術史分科会例会、平成11年
10. 「絵巻の中で天皇の顔はどのように隠されたか—顔隠しの文化の一側面—」於フォーラム顔学'99 第4回日本顔学会大会、平成11年
11. 「絵巻における天皇の姿を描くことをはばかる表現について」於日本宗教文化史学会第3回大会、平成11年
12. 「似絵としての『承安五節絵』—早稲田大学蔵模本を中心に—」於美術史学会例会、平成12年
13. 「長沙馬王堆一号墓帛画の形状について」於第54回奈良美術研究会、平成12年
14. 「天皇を描くことをはばかる表現の終焉—『孝明天皇紀附図』と『明治天皇紀附図』における天皇の顔の表し方—」於早稲田大学美術史学会例会、平成13年
15. 「絵巻における天皇の描かれ方—平安朝から近代まで—」アジア民衆史研究会「君主観と主体の形成 東アジアにおける民衆の世界観(1) 第5回研究会、平成13年
16. 「絵巻において天皇の顔が見えないように描かれる理由—平安時代の美と高貴の表現として」於第53回美学会全国大会ポスターセッション、平成14年
17. 「似絵の始まり—記録と作品—」於第15回明星大学日本文化学部合同研究会、平成14年
18. 「日吉十禅師童形像小考」於早稲田大学美術史学会 日本美術史分科会例会、平成15年
19. 「伴大納言絵詞鎮魂説の再検討—脇役の顔貌表現を中心に—」於日本歴史文化学会シンポジウム、平成16年
20. 「絵巻における神の表現」於仏教美術研究上野記念財団助成研究会平成16年度研究発表と座談会Ⅰ、平成16年
21. 「聖衆来迎寺本六道絵「天道」幅について」於早稲田大学美術史学会総会、平成18年

22. 「聖衆来迎寺本六道絵「人道不浄相図に関する一考察」於科研「交流と伝統の視点から見た仏教美術の研究—インドから日本まで—」研究会、平成18年
23. 「金戒光明寺蔵地獄極楽図屏風の使用方法について」於日本宗教文化史学会第2回例会、平成18年
24. 「雲乗の十一面観音図様再考」於「南都復興における縁起と美術」「寺社勸進・修造をめぐる唱導文芸に関する文献学的研究」〔基盤研究(C)〕研究集会(南都文化研究会共催)平成19年
25. 「明星大学所蔵『平家物語』絵本の挿絵」於—物語絵画における武士～表現の比較研究と作例のデータベース化～科学研究費研究成果発表会「挿絵で読む平家物語—華麗なる奈良絵本・絵巻の世界」平成20年
26. 「熊野曼荼羅に見る日本の神仏一切目王子を中心に」於シンポジウム「君主権の構築と「仏教」文明—日本列島を中心に—」於早稲田大学大隈小講堂、平成22年
27. 「祟る御衣木と造仏事業—なぜ神木で仏像を彫ったのか—」於東アジア恠異学会第70回定例研究会(特別企画「中世美術と恠異」)於京都大学東京オフィス、平成23年
28. 「武者表現の源流—合戦絵巻を中心に—」於民族藝術学会第69回東京研究例会(於お茶の水女子大学)平成23年
29. 「人道不浄相図と九相図の噉相について—なぜ生々しい肉体なのか—」於日本宗教文化史学会第16回大会(於龍谷大学)平成24年
30. 「中空(なかぞら)の異界—「さかさまの幽霊」—再考」於東アジア恠異学会第82回定例研究会(於関西学院大学梅田キャンパス)平成24年
31. 「説話と絵画に見る屋根・天井・軒における恠異」於説話・伝承学会2013年度大会(於静岡文化芸術大学)平成25年
32. 「日本美術史から見たマンガ—日本美術における大人げないもの—」於シンポジウム「マンガのアルケオロジ—視覚的な物語文化の系譜」(於学習院大学)平成25年
33. 「宮曼荼羅から参詣曼荼羅へ—参詣人の出現について—」於日本宗教文化史学会第18回大会(於京都府立大学)平成26年
34. 「上から出るモノ—「さかさまの幽霊」再考—」於国際日本文化研究センターシンポジウム「恠異・妖怪文化研究の現在」(於国際日本文化研究センター)平成27年
35. 「日本における光の恠異」於東アジア恠異学会第100回記念研究会(於京都キャンパスプラザ)平成27年
36. 「見てはならない神々の表現と受容—日本の神々はどうのように表されてきたか—」第66回美学会全国大会シンポジウム「見える神、見えない神—神の不可視性をめぐるレトリック」(於早稲田大学)平成27年
37. 「琳派の人物画について—花よりも印象に残らない理由—」説話・伝承学会2015年度秋季大会講演会「琳派400年に因んで—絵画と説話・伝承」(於京都女子大学)平成27年
38. 「京都市立芸術大学所蔵「平家物語絵巻」粉本について—伝土佐光信筆「平家物語絵巻」の模本として考える—」説話文学会平成28年度大会(於慶應義塾大学)平成28年
39. 「絵巻はマンガの祖先か?—絵巻とマンガの表現を比較する—」〈特集〉対論的シンポジウム—絵巻と漫画をめぐる—日教研共同研究「投企する古典性—視覚／大衆／現

代」(於国際日本文化研究センター) 平成29年

40. 「神を見ることの賞罰」東アジア怪異学会第109回定例研究会 特別企画〈他者〉の怪異学(1)「他界との交渉」(於大東文化会館) 平成29年
41. 「上から出る幽霊のこと―「さかさまの幽霊」再考―」第2回死霊表象研究会(於二松学舎大学) 平成29年
42. 「『新曲』挿絵について―奈良絵本製作における版本の使い方―」頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラムによる国際会議「文化創造の図像学―絵写本・奈良絵本、絵入り版本とその周辺―」(於名古屋大学) 平成30年
43. 「つなぐ霞―物語表象から」説話文学会9月例会シンポジウム「お伽草子と説話」(於学習院女子大学) 平成30年
44. 「大報恩寺蔵十大弟子像の尊名比定について―瞳の白点表現を中心に―」日本宗教文化史学会例会(於同志社大学) 平成30年
45. 「切目王子小考―片足の童子神―」熊野三山歴史講座(熊野三山歴史協議会)(於ホテルニューパレス) 平成31年
46. 「上から出る幽霊―幽霊はなぜ蚊帳に入れないのか―」「幽霊の歴史文化学ふたたび」死霊表象文化研究会(於二松学舎大学) 平成31年
47. 「縁起物考―異界の価値観から―」説話・伝承学会「2021年度春季大会」於立命館大学(オンライン) 令和3年
48. 「長岳寺所蔵「六道十王図」における天道の所在について」日本宗教文化史学会12月例会(オンライン) 令和3年

山本陽子先生のご定年に寄せて

小 林 一 岳

本年度ご退職を迎えられる山本陽子先生に、感謝の言葉を述べさせていただきます。

山本先生は2002年に本学に勤務され、当時は青梅キャンパスの一般教育において主に教養教育にあたられました。2010年の日野キャンパスへの移転に伴い、人文学部全学共通教育に移られ、2018年からは教育学部教育学科で全学共通科目以外にも専門科目や資格科目等、多くの科目を担当されました。さらに全学共通教育委員会がカリキュラム改革等で重要な時期に、2年の間委員長を務められ、本学の教養・語学・健康教育の改革・発展に大きく力を尽くされました。

先生のご専門は日本美術史で主に絵画、特に絵巻物が中心となります。早稲田大学で「絵巻における神と天皇の表現」で博士（文学）の学位を取得され、2006年の『絵巻における神と天皇の表現―見えぬように描く―』（中央公論美術出版）を始めとして多数の著書・論文を著されています。

多くの御著書を先生からいただきましたが、中でも2023年の『物語る仏教絵画―童子・死・聖地―』（勉誠社）はたいへん面白く読ませていただきました。絵画だけにとどまらず、説話や当時の文献と図像を密接に絡ませながら、その絵がなぜ女性の姿で描かれたのか、などの謎解きをしていくスタイルには、まるでミステリーを読んでいるような知的興奮を覚えました。

ここで僭越ながら、山本先生に学ばせていただいたことを紹介したいと思います。私自身は文献史学で日本中世史が専門になります。特に鎌倉時代後期に現れた幕府に抵抗する悪党を研究対象としています。

ある時、全学共通の事務室で山本先生とお話していた際に、一枚の絵を見せていただきました。よく見ると、なんとそれは悪党が築いた城が描かれたものでした。小高い丘を廻って道を造り、途中に櫓を築いて盾を並べ、悪党が城を攻めてくる敵と戦っている絵でした。丘の頂点には悪党張本とみられる人物が仁王立ちし、周囲を睥睨しています。まさに、『峰相記』という同時代の文献史料に描かれている、悪党の城そのものの姿でした。

この絵について先生に伺うと、仏教的地獄等の六道のありさまを描く『六道絵』で、鎌倉時代後期の成立とのことでした。まさに悪党の時代に合致します。仏教絵画に悪党が描かれているとは、まったく思いもしませんでした。私はそれまで絵画については、文献史料の補足として歴史学に使える程度のものだと思っていましたが、この絵により絵画そのものの持つ力を、改めて認識させていただいたと思います。なおこの場面は、今では悪党研究者に広く知られるようになっています。

山本先生のご研究は、当該専門分野の研究者だけでなく、周辺分野の研究者にも大きな刺激と影響を与えていますし、今後も与え続けて行くと思います。また山本先生は、八王子市の「いちょう塾」等で広く市民向けの講座を行われています。先生のご研究は、研究者のみならず一般の方々をも引き込む魅力を持つ素晴らしいものです。私も、これからも先生から多くを学ばせていただきたいと思いますと思っております。

山本先生のますますのご健康とご活躍をお祈り申し上げます。本当にありがとうございました。